きさいやロード事前復興プロジェクト

１年１組　中野　桃伽　１年２組　池田　彩花　１年３組　白石　柊椰
１年３組　大野　　碧　１年３組　酒井　萌衣
指導者　中村　俊貴

１　課題設定の理由

南海トラフ地震が 30 年以内に起こる確率が高くなっていることから、東日本大震災の被害と重ね合わせ防災について調べるようになった。その中で被災する前から被害に備えて、復興しやすい街にする事前復興というものを知り、宇和島を災害に強い街にしようと思い立った。

２　仮説

先行研究において、現在の商店街（きさいやロード）は江戸時代に港に面しており物流が盛んだったことがわかった。また、商店街は埋め立て地ではないため、液状化の恐れがないことがわかっていることから商店街は事前復興の中心になると考えた。

３　研究の方法

(1)　レイヤー分析

昭和 39 年、昭和 62 年、平成 17 年の３つの地図を使いレイヤー分析を行う。

注釈）レイヤー分析とは複数の同じ縮尺の地図を使い、その土地の変遷を調べる分析方法。

図１
昭和 39 年の宇和島の地図

図２
昭和 62 年の宇和島の地図

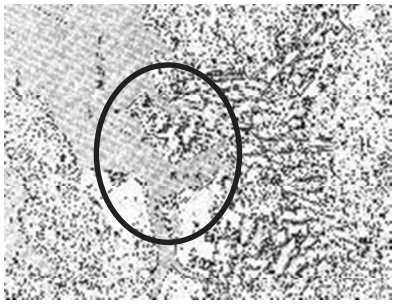

図３
平成 17 年の宇和島の地図

上記の円で囲んだ部分が変化している。

(2)　伊達博物館で昔の資料や学芸員から情報を得る。

４　結果と考察

レイヤー分析では住宅街と埋め立て地などが変化しており、陸路と商店街の位置は変化していないことが分かった。

伊達博物館では、昔の地図や宇和島の街の作りを知ることができた。また、商店街の入り口方面には浸水被害が想定されることが分かった。

このような結果から私たち昔から商店街は宇和島の物流の中心であり、その機能を生かし災害後にすぐ物資の調達ができるのではないかと考えた。

商店街は大きく４つのエリアに分け、それぞれのエリアに生活必需品を売る店を置き、災害後１つのエリアになっても復興時に物流の拠点として機能するように配置する。商店街は２階建てにし、１階は駐車場や倉庫などにして車で商店街に訪れるようにする。また、車で訪れられるようにすることで、家族層や若者も商店街に足を運ぶようになる。そして、２階には店舗

を置き、通路は図のように２つに分ける。分けることによって宇和島の伝統行事である牛鬼祭りで、商店街を通過する際に２階から牛鬼を間近に見ることができる。そのため、商店街への集客効果が見込まれる。

商店街の主な入り口は南予文化会館にして、２階にも通じる大きな入り口にする。２階に通じる階段の真ん中に手すりがあり、上り下りを分けて混雑を防ぐ。そして、商店街内のエリアごとに１つずつエレベーターを置き、足が不自由な方や高齢者の方が２階に行き来出来るようにする（**図４**参考）。

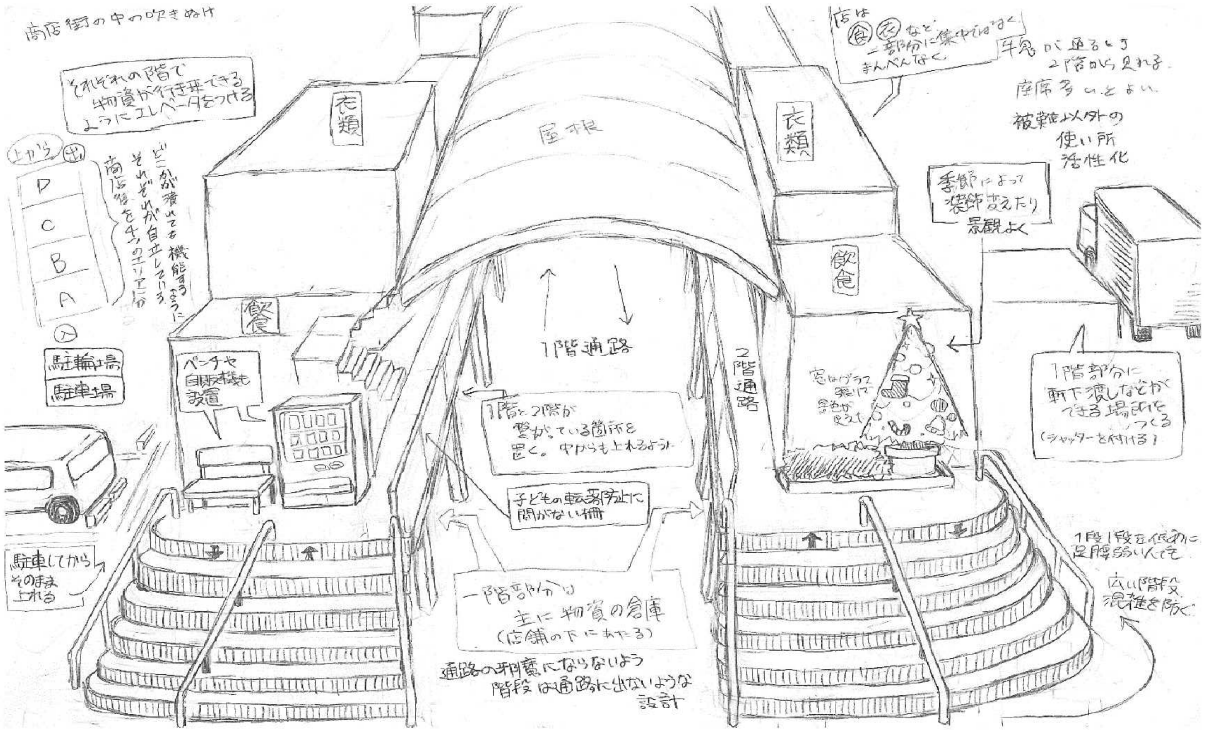

図４　商店街のイメージ図　　酒井　萌衣　作成

５　今後の課題とまとめ

商店街のモール化の具体的な場所の選定が課題である。南予文化会館前の正面玄関付近が候補に挙げられる。また、南海トラフ地震被害を想定した上で、災害後の宇和島の早期復興を目指して事前にできることを考える。

謝辞

今回、伊達博物館をはじめ、東京大学の羽藤先生や小関さん、愛媛大学山本先生、薬師寺先生など、たくさんの方にお話を伺いながらデザインを考えてきました。たくさんのご協力ありがとうございました。

参考文献

・伊達博物館所蔵地図
・愛媛県歴史博物館(2020)「令和元年特別展解説図録　四国・愛媛の災害史と文化財レスキュー」
・宇和島市(2014)「宇和島市防災マップ」
・国土地理院(1964, 1987, 2005)「宇和島市」